

## ジャワ島訪問記：バンドンのジャングル調査とボゴール植物園

木佐貫 博 光\*

三重大学生物資源学研究科

### Memory in Java Island: Forest research at Bandung Jungle and visit to Bogor Botanical Garden

Hiromitsu KISANUKI\*

Graduate school of Bioresources, Mie University, 1577 Kurimamachiya-cho, Tsu, Mie 514-8507, Japan

#### Abstract

Mr. Indra Fardhani, a doctor course student and I visited Java Island, Indonesia from July 27 to August 5 in 2018. One of the purposes of this visit was data collection for his doctor course study about host tree environment of epiphytic orchids in a jungle of a montane forest at Bandung city. Another is observing tropical plants at the Bogor Botanical Garden. Here I report the experiences at those two places in West Java.

**Key Words:** Bandung, Bogor, Montane forest, Study trip, West Java

インドネシア共和国からの留学生を指導することになったのは2015年であった。その3年後、同国ジャワ島のジャングルでその学生と一緒に植物調査をすることになった。また、以前から行ってみたかった由緒あるボゴール植物園に立ち寄ることができた。そのときの行動記録などを報告する。

きっかけは偶然であった。当てにしていた社会系の三重大学教員が他大学に異動してしまったという留学生を、代わりに指導教員として受け入れてもらえないかとT先生から依頼された。戸惑ったが、研究テーマに着生ラン (epiphytic orchid) の文字が目にとまった。着生ランとは、地面に根を張る植物とは異なり、樹木の幹や岩の表面に根を這わせて生育するラン科植物の総称である。ランといえば、私は中学生のころ野生ランの虜になり、宮崎県都城盆地の実家から5～10km離れた鰐塚山地に毎週末のように通ったものだ。そこでの着

生ランの主なものは、セッコク、フウラン、ポウラン、ナゴランで、なかでもフウランとナゴランは花の美しさだけでなく芳香が素晴らしい。よく目にする洋ランのデンドロビウムやコショウラン(図1)は、熱帯産の着生ランの交配品種だ。着生ランのお陰で、留学生の件を引き受けることにした。



図1 今や洋ランの代表といっいいいコショウラン

2020年6月24日受理

〒514-8507 津市栗真町屋町1577

\* For correspondence (e-mail: kis@bio.mie-u.ac.jp)

2015年4月、インドラ君 (Indra Fardhani) が、インドネシア共和国西ジャワ州バンドン市 (Bandung) に位置するパジャジャラン大学 (UNPAD) とのダブルディグリープログラムで、当研究科博士前期課程に入学してきた (図2)。インドラ君は、翌年3月に課程修了後いったん帰国し、2016年10月、博士後期課程の学生として再び研究室に戻ってきた。彼の研究テーマは、ジャワ島西部の山地帯に広がる森林に生育する樹木に着生するランの種多様性評価と保全であった。彼は博士後期課程1年目に数週間インドネシアに帰国し、ジャワ島で着生ランの群集に関する現地調査を行い、まずまずのデータを揃えて帰ってきた。彼がとってきたのは、ランが着生する宿主樹木の幹直径や樹高、宿主樹木ごとの着生ランの種数と個体数であった。一方、それらの測定データだけでなく、宿主樹木の生育環境についてのデータが加われば、研究の質がずっと高くなる。ここでの生育環境とは、宿主樹木を取り囲む樹木の樹種や本数密度、宿主樹木の根元位置における斜面方位や傾斜である。しかし、調査経験のない彼に任せて、これらのデータを取って来させることは困難である。そこで、私が一緒に現地に行き、調査を行うことにした。この提案が、彼を歓喜させたのは言うまでもない。日程については、雨季を避けること、ラマダンが明けてしばらく経って協力者たちの元気が回復するのを待つこと、という2つの条件があったため、2018年7月下旬に決まった。飛行機の便やホテルの候補をインドラ君が提案してくれてとても助かった。しかし、必要な持ち物を尋ねても、現地でも何でもそろるので、服以外は特に不要との返事だった。マラリア対策



図2 博士前期課程に入学してきたインドラ君と研究室学生。2015年4月

の薬は現地のほうが安いので持参不要だし (実際は、現地に着いてから、内陸部にはマラリアをもつ蚊はいないので、何もしなくてよいと説得された。)、靴もジョギングシューズ程度でいいなどと言っている。ただし、心配するほどではないが、ちょっと寒い日があるかもしれないと言っていた。しかし私は、初めてのジャングルでの生活に恐れをなし、彼のいうことを鵜呑みにせず、ザックとバッグに次のものを詰め込んだ。3人用テントとフライシート、テント用シート、アルミペグ、エアーマット、3シーズン用の羽毛シュラフ、シュラフカバー、蚊取り線香、登山靴、スパッツ、フリース、雨具、ヘッドランプ、救急箱、水筒。東南アジアといえば、料理が辛いのが定番だ。以前チェンマイでひどい目にあった経験から、鯖の缶詰なども非常食として忍ばせた。結構かさばってしまい、現地の方々へのお土産がつぶれないよう苦心した。それでは、2018年7月27日の出国から8月5日の帰国までの記録を以下に示す。

#### 7月27日

セントレアでの搭乗時刻は9時半だった。インドラ君が2時間前までには搭乗手続きカウンターに並びたいと希望するので、前泊したセントレアのホテルのロビーで7時に待ち合わせた。朝食をとってチェックアウトしにロビーに行くと、食事を済ませていないインドラ君が私を待っているではないか。お互いに思い込んでいたので、今後は十分確認を取ることにした。搭乗手続き時に、彼は手荷物で味噌を持ち込もうとして拒否されてしまう。今回は大韓航空の利用で、ソウルの仁川空港にて乗り換え、ジャワ島西部に位置する首都ジャカルタの空港へ。到着が遅れたのは仕方のないことだが、仁川空港と同じく、彼の荷物が最後に出てきたうえに入国審査をしっかりとられたため、30分以上のロスとなった。また、空港が改修されたらしく、乗合バスの発着場所が見つからない。ようやく見つかったものの、満員のため次便まで1時間待つことに。23時を過ぎてようやく乗ることになったのは、8人乗りの乗合バスであった。サービスなのかエアコンをかなり効かせてくれて、長袖2枚を着ても寒かった。高速道路の大渋滞を回避するために一般道に降りたため、混まなかったのはよいがバウンドがすごかった。未明にバンドンに到着したので下車し、そこから

タクシーでホテルバナナインへ。日本時間の7時、現地時間の5時にチェックイン。空港から8時間も要した。予約時に恐れていた通りダブルベットひとつしかなかったが、インドラ君はそれも見ずに用があると一言残して立ち去っていった。

### 7月28日

ホテル到着の3時間後に目覚めると、とても眺めのよい素敵な部屋だった。惜しかったが、朝食後に部屋をツインに変更してもらおう。バイキングの朝食は種類が豊富ですばらしく美味しかったのに、インドラ君は現れず。疲れて11時まで寝ていたのだとか。そして彼は、昼にロビーで待ち合わせだったが、やはり来なかった。30分くらい遅れてようやく現れた彼に連れられ、近所のレストランへ歩いていく。奥まった場所に位置する半屋外のテーブルに着くと、そこには8人の男女が待っていた(図3)。食事前にメンバー紹介とミーティング。Sarip;今年も卒業できなかった太っちょの4年生、料理当番を請われて。Opang;爬虫類を研究する進学希望の4年生。Azhar;環境コンサルタント会社勤務のOBで、ツリークライミングの名人。近々ボルネオ島の調査へ行く予定だが、今回は気になって参加。Abelia;初等教育学の4年生で今月卒業したばかり。近々小学校の教師になる予定。Dias;パプア島沖でシャチの研究する院生!シャチは模様で個体識別することや、そのシャチが日本近海まで移動することを教わる。Rizal;長身で野人的な4年生。Aca;サルを研究していた大学7年目の4年生で祝卒業!すでに企業に内定。Wahyu;教育学の4年生。彼氏のAcaから海に行くと言われての不本意参加。Rila;小柄なアンジェリーナジュリー似の4年生で、8月までに提出する必要があるフタバガキ科



図3 昼食を囲んで調査出発前日のミーティング

樹木の卒業論文から逃避して調査に参加。Aping;学部4年生ながら植物にとっても詳しい強力な助っ人。彼らはみな、UNPADではなく、インドネシア教育大学(Universitas Pendidikan Indonesia, UPI)のアウトドア系サークル“Nature Lover Group-Biocita Formica”に所属する学生および卒業生であった。そういえばインドラ君は、UPIの学士卒業生であり、UNPADには修士課程入学なのであった。スーパーでサンダルやお菓子など購入し、夕食後はUPIの構内散歩。暗闇にぶら下がるジャックフルーツの巨大な果実が印象的であった。

### 7月29日

ホテル前の道路に7時集合のため、朝食をそくさととった。しかし集合場所で数名の遅刻者を待つようだ。集まったと思えば、今度は道路脇に出ている屋台で朝食を振舞い始めた。朝と夜に道路脇のあちこちに屋台が出ていて、ドーナッツやら粥やら色んな食べ物が売られていた。やれやれ、でもこれがこの国の時の流れか、と理解に努めつつ、ようやく貸切の乗合バスで出発。助手席に乗ると後ろからOpangがいろいろと解説してくれた。ここが市場、ここが農業研究所などなど。1時間足らずで車両通行止めの所に到着。トイレはモスクで借りる。1つなので男女共用。正しい向きに気づくのがかなり後になってからだったが、逆向きにしゃがんだので不便であった。また、バケツに水が溜めてあるが、紙は置かれていない。持ち合わせの溶けるティッシュで拭き、バケツの水で流す。

ここからは荷物を背負って徒歩で移動。はじめ舗装されているが、最後の集落を過ぎるとまもなく未舗装に変わった。暑くて乾燥しているので、歩くと赤い土ホコリが舞いあがった。メルクシマツ(*Pinus merkusii* Jungh De Vriese)の人工林では、樹脂採集のためにつけられた大きな傷が目立った。マツ林の下層には、しばしば常緑広葉樹であるコーヒーが植栽されていた(図4)。コーヒーの葉色は極めて濃緑だ。途中の集落ではコーヒーの果実を天日干しているところがあった(図5)。また、バナナもあちこちでみられた(図6)。果実を食用にするための植栽と思いきや、実はそれらは野生のバナナであり、種子が大きいので果実は食用にならないのだそうだ。その代わりに、葉を包装



図4 メルクシマツ林の下層に植えられたコーヒー



図7 山で刈り取った草を満載して走るバイク



図5 途中の集落でコーヒーの果実を天日干していた



図8 まばらなユーカリ林の下層に整然と広がる野菜畑



図6 野生のバナナは農村から森林にかけてのいたるところでみられる

などに利用するので切られずに残されているのだという。すっかり狭くなった森の小径を歩いていると、刈り取った草を後部に満載したバイクが走ってきた（図7）。歩いている間に同じバイクと何回かすれ違ったが、絶妙なバランス感覚が求められそう。山奥の草地で刈り取り、牛の飼料にするのだろう。細い幹がまっすぐ伸びるユーカリの人工林も多くみられた。木材利用に加えて、葉か

ら精油成分を採取するという。ユーカリ林の一部の下層では、整然と整備された野菜畑が広がっていた（図8）。他には、キナノキ属（アカネ科 *Cinchona* 属）の常緑低木がよく植えられていた。樹皮にマラリアに対する薬効成分が含まれるため、オランダ統治時代に植林されたようだが、現在では需要が減って野菜畑に転換されつつあった。近道をするため、車道に出たり、小道をショートカットしたりを繰り返した。車道は未舗装で、急な所ではブロックくらいの大きな碎石が敷設されていた。これもオランダ統治時代の名残なのだろうか。だんだん森に近づくと木生シダであるヘゴが増え、熱帯にいることを実感させてくれる（図9）。

途中2回の休憩を含めて歩くこと3時間、道路から森に分け入る小径をしばらく進み、木々に囲まれた50平米ほどの広場に到着した（図10, 6°48'41S; 107°44'43E, 標高約1700m）。どうやらここがベースキャンプのようだ。前年まではもっと広々としたところだったというが、森林の下層に

植栽されているコーヒーの木の周囲の刈り払いがされておらず、大きな草や低木が生い茂って見通しが良くない(図11)。熱帯雨林では、森林の下層でコーヒーや野菜を栽培するアグロフォレストリーが珍しくない。このやり方は、森林を完全に伐採しないため、森林環境を保全しているとされる。まず、彼らが持ち寄ったテント4つを張り、そのあとで私が日本から持ち込んだテント1つを張った。テントの1つは食材用なので、私以外の12人は、3張りのテントに分散した。インドラ君からは、協力者の集まりが芳しくないようなので、テントは不要だと出国前に言われていた。当初の予想以上に人が集まったこと自体は喜ばしいことだが、念のためテントを持参して本当に良かった。というのも、焚火を囲んだ夕食後の歓談や歌会、カードゲームが連日繰り広げられ、最後まで付き合いと寝不足になる恐れがあったからだ。さて昼食は、さすがにかまどではなく、コンロで作りを始めた(図12)。シートの上にバナナの葉を

裏返しに置き、その上にご飯を広げ、数種類のトッピングを加えていく(図13)。準備ができれば全員が座ってその周りを囲む(図14)。いただきますの合図をするやいなや、みんながご飯を手でつかみ、口に放り込み始める。予想を裏切らず、私がかうまくできないのを見かねて、スプーンを渡してくれた。もともと食べるペースが遅いうえに、屋根もない森の中で野趣あふれる東南アジアの料理をのんびり味わっていると、葉の上の食べ物は瞬く間に減っていった。そして、女性と私の前にだけご飯の島が残った。皆さん遠慮して私に多くを残してくれたようだ。次からは、手前から食べるのではなく、境界をつくりながら食べ進み、小さなご飯の島を早めに独立させるようにした。「適度な辛さでとてもおいしかった。」と礼を言うと、「徐々に辛さを強くしていくのでお楽しみに！」とのSaripシェフからの返事。期待半分、恐怖半分。

食後は待ちに待った調査である。これをやるた



図9 森に近づくとヤシのような形をしたシダ植物ヘゴが増える



図11 森林下層のコーヒー植栽木が放棄され見通しが悪い



図10 ベースキャンプ。アウトドアサークルによってよく利用される



図12 昼食の調理中。とても楽しそう

めにはるばる日本から来たのだ。まずは近いところで練習を兼ねて始める。予定していた調査範囲を半径 30m の円内にすると、時間が足りなくなることがすぐに判明した。その主な理由は、コーヒー植栽木周囲に生い茂った灌木などが行く手と視界を遮るからだ (図 15)。樹高 30m 以上の森なので、調査区の理想は半径 30m の円内である。しかしそれでは終わらないので、仕方なく半径を 20m に狭める。ホスト樹木の幹の根元を中心とする半径 20m 以内に生えている、直径 30cm 以上の樹木の樹種名と幹の直径、ホスト樹木との樹高の優劣、ホスト樹木根元から各幹までの距離を測定した。さらにホスト樹木については、斜面の方位と傾斜度を計測した。数本のホスト樹木周囲の樹木調査を終え、みんなは調査方法を大まかに理解してくれたようだ。

午後 6 時ごろ暗くなるため、夕食は乾電池のライトのもと、お昼と同様の食事会となる。夕食前には、皆さん水で身を清め、腰に布を巻いて、お



図 13 昼食の盛り付け。裏返しにしたバナナの葉の上にご飯を広げ、後から数種類のトッピングを加えていく



図 14 食事はしゃがんで右手で食べる

祈りを欠かさない。敬けんな信者たちだ。初日の夜ということもあり、焚火を囲んだ談笑や歌会を楽しみながら、夜が更けていった。

#### 7月30日

朝 7 時に目覚めると、とても寒い。それもそのはず、気温がたったの 8.0°C しかない (図 16)。7 月末の南半球なので、日本でいえば冬至の時節であるが、いくらなんでもこれほど寒くなるとは思っていなかった。メンバーの一部は、装備が貧弱なため、さすがに寒くてよく眠れなかったようだ。不要かもしれないと思っていたシュラフカバーとフリースが活躍した。山での快適さは装備に依存することを改めて実感した。

この日の日中、高いところから枝がバキバキとへし折られるような大きな音が近づいてきたので驚いた。サルを研究していた Aca 君によると、リーフモンキー (*Surili, Presbytis comata*) なのだそうで、こちらに気づいてから、音は次第に遠のいていった。またこの日は、野鳥を捕獲するため



図 15 視界を得るためにコーヒー植栽木周囲の生い茂った灌木を刈り払う

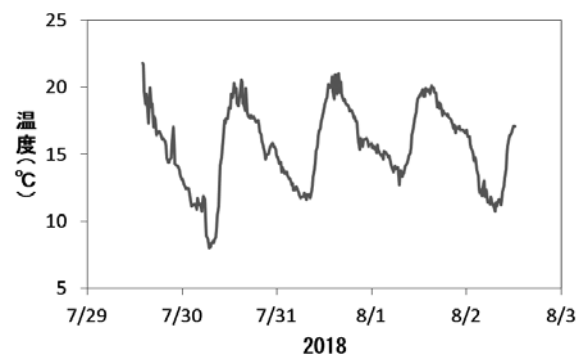


図 16 森林滞在中の気温。最低気温は、7月30日午前7時の 8.0°C





図 17 Forest Dragon (*Gonocephalus* sp.) を素手でつかむ Rila さん



図 18 着生ランの宿主樹木、イジュ (*Shima wallichii*)

の罠をしかける人や、何を狙いにきたのかライフルを肩にかけた人がたまに巡回してきた。ハンターは目つきが鋭いので緊張させられた。また、爬虫類が5種類も登場した。日本のトカゲの俊敏さと対照的に、いずれもおとなしくじっとしていた。なかでも大きくて派手な緑色をした Forest Dragon (*Gonocephalus* sp.) を、Rila さんがさっと素手で捕らえてしまった (図 17)。それらトカゲ類を研究対象としている Opang 君が興奮気味に説明してくれた。しばらく調査を続けていると、樹木にタグを固定するための釘が足りなくなってきた。体力のある男性2人に街まで買いに行ってもらおう。戦力が減ってしまうが仕方がない。しかし、夜になってもなかなか戻って来ないので、とても心配した。すぐに見つからず探すのに手間取ったようだ。代わりに、別の年長の助っ人 Fuji

君が暗闇の中からライトとともに現れた。彼はとくに夜の部で活躍することになったが、私には気になっていたインドネシアのコーヒー産地と味についての詳細を教えてくれ、また、日本のアニメが非常に大人気であることを教えてくれた。なかでも、ドラゴンボール、ナルト、ワンピースについて色々聞かれたが、答えられず。彼らにとっては残念なようであった。しかし、私が仮面ライダーの変身を真似たら、大受けしてくれたので面目躍如か。彼らは月光仮面について私よりも詳しく、彼らにとっては日本アニメに新旧の区別はあまりないようだ。今度行くときはアニメソングくらい覚えておこう。

#### 7月31日

ベースキャンプ近くでの測定が終わってきたので、だんだん離れた場所まで移動して調査するようになった。きゅうりの匂いのするツル植物の果実や、ウリの仲間、酸っぱい果実を見つけてくれたので、昼食時に味わった。

ここでホスト樹木について説明する。ホスト樹木には、この森で優占する常緑広葉樹イジュ (*Schima wallichii* Choisy (Theaceae)) を選んだ (図 18)。イジュの主な分布域は東南アジアであり、日本でも小笠原諸島と琉球列島に自生する。ツバキ科に属するこの種は、大きなもので直径 250cm、樹高 45m に達するという (Orwa et al. 2009)。インドラ君の修士課程での研究が予備調査になり、まっすぐ伸びた高い幹に数多くの着生ランが認められたイジュが、この調査地でのホスト樹林として最もふさわしいことが分かっていた。一方、東南アジアの熱帯雨林の優占種といえば、フタバガキ科 (Dipterocarpaceae) 樹種が知られるが、この森で目にすることはなかった。聞けば国内でその多くが絶滅危惧種に登録されているという。いくつかのフタバガキ科樹種は、地上高 40m ほどの林冠層から飛びぬけた樹高 60m の超高木 (emergent tree) に成長することができる。調査を行った森林は国有会社が管理する保護区 (protected forest) に区分されてはいたが、森林が維持されればその下層の扱いは問われない緩めの規制のようで、過去に選択的伐採が行われた可能性がある。

#### 8月1日

この日に調査を行った場所では、大きな枝とと

もにたくさんの着生ランが落ちていた。そのなか  
に、葉の割に花が大きな美しいラン (*Coelogyne  
trinervis*) が咲いていた (図 19)。このまま枯れて  
いくのかと思うともったいないが、持ち帰るわけ  
にもいかない。調査は、調査対象である 40 本の  
ホストのうち、32 本の測定を完了することがで  
きた。まずまずの本数データが集まり、胸をなで  
おろした。

ところで、恐れていた腹痛が最終日前日の夜に  
ついにやってきた。思い当たる原因はいくつかあ  
る。夕食前に私にスペシャルで渡されたメロン半  
玉に入ったフルーツ盛り、生で飲んできた真水、  
最後の晩餐ということで、つついご飯に加えて  
しまった本格辛味ペースト。後の祭り、間もなく  
腹のなかが活発に動き出す。トイレにたびたび  
行くが、地面にジャングルナイフ (図 20) で穴  
を開ける即席トイレであるため、そのたびに場所  
を変えなくてはならない。だんだん面倒くさくな  
り、夜 10 時ころ、ほかの人が来ないと思われる



図 19 着生ラン (*Coelogyne trinervis*) の美しい花



図 20 ジャングルのトイレでは必需品のジャングル  
ナイフ

遠い場所まで移動し、それまでよりも大きな穴を  
掘ってしゃがんだ。そこではホタルがよく飛び交っ  
ていた。そのホタルは全く点滅しないので、光  
がスーッと、まるで人魂のように移動した。結局、  
ジャングルの霧の中、ホタルを鑑賞しながら 1 時  
間もしゃがむことになった。ある意味では悲惨な  
自分だが、75 年ほど前には、この国を占領して  
しまった日本の兵隊が悲惨な戦いを繰り広げた過  
去に思いを馳せ、現在の平和な日本とインドネシ  
アとの関係に感謝する。腹痛がある程度治まった  
のでキャンプ地に戻ると、半分以上の人がテント  
に戻って眠っていた。焚火の余韻を楽しんでいた  
人々を、眠っているのだらうと思われていた私が  
現れ、驚かせてしまった。

### 8月2日

いよいよ撤収して、森を離れる朝が来てしまっ  
た。ここでの生活がすっかり気に入り、学生時代  
に所属したワンダーフォーゲル部の活動との共通  
点も多く、もうしばらくこのままの調査とテント  
生活を続けたかった。前日の夜に少し雨がちらつ  
いたくらいで、天候にも恵まれたから呑気にそう  
感じたのだろうか。感傷に浸っていると、撤収後  
の広場で、ヘビー級の二人 Sarip 君と Dias 君と  
が突然相撲を取り始めた。本気で取っ組み合うの  
で、ちょっと危なっかしい (図 21)。両者譲らず  
2 勝 2 敗で迎えた 5 戦目は微妙な勝負になり、行  
司役から相撲のルールを質問された。これもまた  
日本文化に興味を持つてのことだ。私はどれだけ  
インドネシアのことを知っていて、ここに来たの  
だろうか。少し恥ずかしくなった。来た道を徒歩  
でてくてくと下った。バイクで来たメンバーとは  
途中で別れ。バスを待つ間に、インドラ君が皆  
にアイスを振舞う。乗合バスに乗り、バンドン市  
街へ出発 (図 22)。市街に近づくにつれてどんど  
ん増えていく交通量に、森での生活への未練が高  
まった。

夕方が近づいたころ、メンバー 2 人がバイク 2  
台で、インドラ君と私をホテルまで迎えに来てく  
れた。時間節約のためと言われ、歩きたかったも  
のの後部シートで乗り、渋滞のなかインドネシア  
教育大学 UPI に向かった。同大学の植物園は、  
面積は小規模ながら、約 50 種のまとまった樹木  
が植栽されていた (図 23)。一通り樹木の観察が  
終わると、インドラ君および協力者らの指導教員





図 21 相撲を取る Sarip 君と Dias 君



図 24 インドネシア教育大学の Yusuf 博士とインドラ君



図 22 バンドン市街へ向かう乗合バス



図 25 調査の打ち上げ



図 23 インドネシア教育大学の植物園

である Yusuf 博士とお会いした (図 24)。彼は UPI 理数教育学部生物教育学科所属の准教授で海岸生態学を専門とし、以前、東京学芸大学に長期滞在されたとのことだった。UPI の建物が、JICA の予算で建設されたことに関わられたようで、他大学と異なり、建物だけでなく施設の予算も獲得したのは画期的だったと誇りにされていた。Yusuf 先生と協力者として、大学近くのレストランで、打ち上げと送別会を兼ねたディナーパー

ティー。といっても、日本とは異なり 1 時間程度の食事会であった (図 25)。バンドン最後の晩なれど、腹の調子が優れないのはまことに残念であった。

### 8月3日

ホテルで朝食に向かうと、チャンドラ君 (Arief Wirawan Raden Mochamad Candra) が会いに来てくれていた (図 26)。彼はインドラ君の一足先に生物資源学研究科で博士課程を修了した先輩にあたる。帰国後 1 年経過し、UNPAD で講義を担当しているとのことだった。バンドン中心部にあるバスステーションまで見送りしてくれた。途中で第 1 回アジア・アフリカ会議の議場を目にし、ささやかで唯一の観光気分を味わった。そこからボゴール行きのバスに乗る。物売りが、バス停ごとに乗ってきては次のバス停で降りていく不思議な光景を見た。ボゴールまで 5 時間を要した。歴史ある古びたロイヤルホテルにチェックイン後、乗り合い自動車が目当てのボゴール植物園へ。門には機銃を肩にかけた迷彩服の兵士が数名にらみ

を利かせていた。物々しいのは植物園の中に宮殿があるためだ。待ち合わせていたボゴール農科大学農学部の Dewi Sukma 博士とランの研究所を訪問した。彼女とは、同年3月にソウルで開催された国際ランシンポジウムで知り合った。ラン研究所では、国内産の数多くの野生ランが栽培されており(図27)、ここでは調査地で記録したいくつかの着生ランを確認できた。また、収益を上げるためであろう、ランの組織培養が盛んに研究されており、ほとんどがインターンシップの若い女性学生を労力とした栽培実験が行われていた。瓶の中に寒天培地を固め、そこでランをある程度大きく育ててから販売していた。Sukma 博士はランを研究しているが、「育てるのは下手なのよ。」と言いつつ、嬉しそうにラン入り瓶をいくつか受け



図26 研究科修了生のチャンドラ君と



図27 ボゴール植物園内のラン研究施設の野生ラン栽培園。ボゴール農科大学の Dewi Sukma 博士(中央)と

取っていた(図28)。たまたま結婚式が開催されていた植物園のお洒落なレストランで夕食をとった。インドラ君がなぜか黙って2人の女子学生を呼んでおり、5人で食べることになったのはご愛敬。

#### 8月4日

半日ほど一人で植物園を視察し、学生時代から気になっていたフタバガキ科樹木の巨大な幹や特徴的な果実を見ることができた(図29, 図30)。カカオ、タビビトノキ、バオバブやグネツム、アルソミトラ(*Alsomitra macrocarpa*)の種子など熱帯に特異的なものをたくさん見られたのは収穫だった。また、温帯系落葉広葉樹のヤナギ属樹木が大きく育っていたのには驚いた。植物園内には、昨日訪問したランの研究所のほか、ランの展示館、



図28 ラン栽培瓶を手に嬉しそうな Sukma 博士とインドラ君



図29 フタバガキ科樹木の巨大な幹(左側)



図 30 フタバガキ属樹木の特徴的な果実

そしてなぜか動物博物館もあった。動物博物館には、クジラの骨格標本のほか、トラ、サル、コウモリなど数多くのはく製がそれぞれ生育地を示すパーティションごとに展示してあり興味深かった。一方、閉館中の植物標本館はあったものの、植物を説明する植物博物館がないのは実に不思議である。ランの展示館には歴代館長の写真があり、日本の温帯樹種を代表するブナの命名者 Carl Ludwig Blume 博士など戦前この国を統治していたオランダ人系の館長に並び、日本人植物学者である中井猛之進博士が 1943-1945 年の館長だったことを知った。

ホテルに戻ると、インドラ君が昨日とは別の女子学生と待っていた。彼女にスマホで予約してもらったタクシーに乗り、ジャカルタに完成して間もない鉄道の駅を目指す。それを利用すればスカルノ・ハッタ国際空港まで渋滞とは無縁になり、時間の計算ができるというのが理由だった。車線がないに等しい数車線の道路に、大量の自動車とバイクで道路はごった返していた。しかし、運転手の強引な割込みのお陰で、時間的に随分と余裕をもってジャカルタ中心部に到着した。ところが、カーナビの地図情報が古いので、目的地の駅や道路が掲載されていないことが判明した。ポゴールの運転手なのでジャカルタの地理には全く暗い。数キロある立体道路を何周もして、どんどん時間が過ぎ去っていき、だんだん心配になってきた。人に道を尋ねることにしてくれたおかげで、何とか駅にたどり着いた。ここでもまた現れた別の女子学生のスマホ予約で電車の切符を購入した。ピカピカの列車で空港まで移動し、インドラ君の見送りを受けながら、空路に移った。帰りも大韓航



図 31 博士号を授与されたインドラ君。2019 年 9 月

空の利用で、機内食のビビンバはとてもおいしかったが、付属のコチュジャンを加える勇気はなかった。予約時に空気が少なかったため、トイレに最も近い最後部通路側の席を予約していたのが、不幸中の幸いであった。

### おわりに

インドラ君は、2019 年 9 月に晴れて博士を授与された(図 31)。そして、すぐに帰国していった。現在は、研究職に応募しつつ、コンサルタントで主にメガソーラー開発予定地での生物相調査などを行っているようだ。調査メンバーも、男性 2 人がそれぞれ身を固め、別の 2 人は就職してバンドンから離れるなど、わずか 1 年のうちに目まぐるしい変化があったようだ。あのときの調査は、気のいい数多くのメンバーが、たまたまタイミングよく集まってくれていたのだということを実感する。メンバーにも天気にも恵まれたのは本当に幸運であった。今の私は、苦いマンデリンやトラジャのコーヒーをときどき味わうことで当時のことを思い出し、再びあのジャングルでランの花を楽しみたいと妄想している。

さいごに、写真の掲載を快く承諾してくれた全ての皆様に感謝いたします。

### 要約

2018 年 7 月 27 日から 8 月 5 日まで、博士後期課程の学生インドラ ファルダニ君とインドネシア共和国ジャワ島を訪問した。彼の博士研究のデータをとるために、バンドンのジャングルで着

生ランの宿主樹木の環境計測を行うことと、ボゴール植物園で植物を観察することが目的である。ここでは、ジャワ島訪問で体験したことを報告する。

#### 引用文献

- Orwa C, Mutua A, Kindt R, Jamnadass R, Anthony S. 2009. Agroforestry Database: a tree reference and selection guide version 4.0.  
[http://old.worldagroforestry.org/treedb/AFTPDFS/Schima\\_wallichii.PDF](http://old.worldagroforestry.org/treedb/AFTPDFS/Schima_wallichii.PDF)